

「置き去りにされた」ディアスポラ・ロシア人

木村 英 亮

序章 ソ連解体によるロシア人の立場の変化

ソヴェト末期の1989年、ロシア連邦共和国の81.5%を構成し、名称民族となっていたロシア人は、ソ連総人口2億8600万人の約半分1億4500万人であった。このロシア人に、ウクライナ人、ベロルシア人を加えたスラヴ3民族が、ソ連人口の7割2億人弱を占めていた。

もともと、このロシア人、ウクライナ人、ベロルシア人3民族は、大ロシア人、小ロシア人、白ロシア人とも称され、全体がロシア人と考えられていた。

ロシア人の国家は、9世紀に形成されたキエフ・ロシアに始まるが、13世紀にモンゴルの侵入によって滅びた。16世紀にモスクワ公国でロシアの呼び名が使用されるようになった。ウクライナ、ベロルシアの地域は、ポーランドに支配されることによって、ロシア人と違った民族性が生まれたのである。

イヴァン4世（雷帝）は、16世紀にカザン・ハン国、アストラハン・ハン国を破ってヴォルガ流域を支配下におさめた。17世紀末ピョートル大帝のもとで、コサックは極東のカムチャツカに達した。19世紀初めまでに、ロシアはフィンランド、ベッサラビア、ポーランドなどを併合し、南のカフカスに進出、19世紀後半には中央アジアを征服した。

こうしてロシア帝国は、1897年、ロシア人44.32%、ウクライナ人17.61%、ベロルシア人4.68%、トルコ系諸民族10.82%など200近くの民族から構成される多民族国家となったが、ロシア皇帝のロシア正教、ロシア語の強制と専制支配によって、「諸民族の牢獄」と呼ばれた。広義のロシア人にはいるウクライナ人でさえ、ウクライナ語による教育は許されなかったのである。

ボリシェヴィキは、民族自決権の承認を約束し諸民族の支持を得てロシア革命を成功させ、ロシア帝国を、諸民族の自発的な結合体としてのソ連邦に再編成した。その構成単位の一つロシア連邦共和国では、少数民族を含んだ上で、新しいロシア民族意識、さらにソヴェト民族（人民）意識も生まれつつあった。

ソ連では、工業企業などの産業配置は、構成共和国の国境に関わりなく、全連邦的規模での経済的合理性にもとづいておこなわれた。工業化にともなう都市化によって、都市人口の比率は、1913年18%から89年65.9%となり、多くの百万都市が誕生したが、それはロシアだけでも59年2から89年12となり、都市人口の23.1%を占めた。ここでは多くの民族の混住が普通で、ロシア人が大きな割合を占めた。

このような工業化、都市化を背景として、民族的結集と同化（アシミリヤーツィア）も進み、民族（人種の単位）の数は、1926年の194から79年には101となった。これは小民族の大民族への融合（スリヤーニエ）によるものである。諸民族の接近（ズブリジェーニエ）は、単一のソヴェト民族への融合に至るであろうと展望されていた。ロシア人、ウズベク人などという民族意識とともに、ソヴェト人という意識も育ってきていたのである。

しかし、諸民族の接近と融合の過程は、1991年12月の連邦解体によって、突然中断された。1989年の人口調査によれば、ロシア共和国の外に住むロシア人は2530万人、自民族から切り離されて住む非ロシア人は1880万人であった。ロシア以外の14共和国では、31.8%が非原住民族である。共和国、自治共和国等の民族的・国家的組織をもたない民族は700万人であった。

表1 ソ連・ロシアのロシア人（1989年）

他の民族の名称を冠する共和国、自治共和国、自治州、自治管区に居住するロシア人	3709.20万人
上欄ロシア人のソ連内のロシア人総人口中の比率	25.55%
ロシア共和国中のロシア人の比率	81.53%
ソ連のなかでロシアに住むロシア人の比率	82.58%

（КОТОВ - 212, 217より作成）

解体によって、突然2530万人のロシア人と1880万人の非ロシア人が、他の民族の名称をつけた独立国に住むことになったのである。これは、歴史上他に例を見ない、大規模なディアスポラの誕生であった。

またロシアでも、ロシア人の立場は変化した。共和国と名乗るようになった大部分の旧自治共和国で、ロシア人は過半数を占めるが、名称民族には若干の特権が与えられている。いまプーチン政権は、モスクワの中央政府の権限を強め、これらの共和国の権力を制限しようとしている。

第1章 旧ソ連のディアスポラ

ロシア以外の旧ソ連14共和国に住むロシア人について、「偶発的」ディアスポラ、「置き去りにされた」ディアスポラなどと呼ぶ論者もいる（Пилкин-15）。はじめにディアスポラ概念を確認するとともに、ソ連解体前のおもなディアスポラについて触れておきたい。

ディアスポラという語は、もともとユダヤ史のなかで、強制的離散を意味するガルト（galut）に対し、自発的離散を示す用語として使われてきた。1948年のユダヤ人国家イスラエル創設以降、アメリカをはじめとするイスラエル以外の世界各地のユダヤ人社会を指すようになった。しかし近年、一般に祖国ないし歴史的郷土を離れ、異国に少数派として存在する民族的な共同体社会を示すようになってきている。そして、緊密化する現代世界のなかで顕在化してきた、国民国家というパラダイムを超えるトランス・ナショナルな現象として、また冷戦後の世界の中の民族紛争の発火点の一つとして、その動静が大きな関心を集めている（高坂誠執筆『世界民族問題事典』、平凡社、1995）。

ディアスポラ社会の特徴は、次の4点にまとめられる（Попков-93）。

1. 民族グループ・メンバーの明白な文化的アイデンティティ
2. 有力グループの存在

3. 民族グループ内部の通信網の存在

4. 他のディアスポラ単位との情報網の存在

ソ連のディアスポラとして、ユダヤ人、アルメニア人、タタール人などがよく知られていた。

ユダヤ人は、まさにロシアにおいてディアスポラであった。もともとユダヤ人は、19世紀末には、ポーランドとロシアに半数以上、あわせて511万人が集まっていた。しかし、1881年のポグロム（集団略奪・暴行）を画期として、政府からも定住地の制限など差別と抑圧をうけたため、1897-1914年だけで150万人がアメリカなどに移住した。残ったユダヤ人に革命家になる者も多く、たとえばロシア革命期1917年8月、ボリシェヴィキ中央委員21人中6人がユダヤ人で、トロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフらは指導者として活躍した。しかしソ連時代には、共産党は無神論を党是としていたため、ユダヤ教徒ともみなされたユダヤ人はしばしば抑圧された。そのため、戦後もイスラエルや欧米への移住が進み、1959年226.8万人とソ連で11番目の民族であったが、79年181万人に減った。ペレストロイカ以降は、排外主義・反ユダヤ感情の高まりと出入国規制の緩和、出国税の削減が相まって、イスラエルへの移住が爆発的に増え、いまは100万人を切っている。なおナチスの支配の下での500万人の殺害、戦後のイスラエル移住によって、1996年にはアメリカ合衆国に580万人、イスラエルに460万人、フランスに60万人等となった。20世紀のうちに、これほど世界的に居住地を変えた民族はいない。現在パレスチナ紛争のなかでシャロン首相の政策に見切りをつけたユダヤ人のイスラエル脱出が始まっているとも報道されている。

ロシアとトルコにまたがって居住していたアルメニア人は、とくに1915年のトルコにおける虐殺が移住の画期となった。1989年にアルメニアには308.4万人の他ソ連の地域ではアゼルバイジャン（おもにカラバフ）に15万人、グルジアに43.7万人、ロシア53.2万人、ウクライナ5.2万人、ウズベキスタン5.1万人、トルクメニスタン3.1万人、カザフスタン1.5万人などあわせて154.3万人、その他、中東のトルコ、シリア、レバノン、イラク、イラン、フランス、ギリシア、アメリカなどに650万人居住する。

ヴォルガ・タタールは、ロシアでロシア人に次ぐ552万人の人口をもつ民族であるが、タタールスタン共和国にはその一部176万人しか住まず、他はバシコルトスタン等に分散し、さらに100万人以上が、ロシア以外の旧ソ連地域に住む。

第2章 ソ連各共和国のロシア人

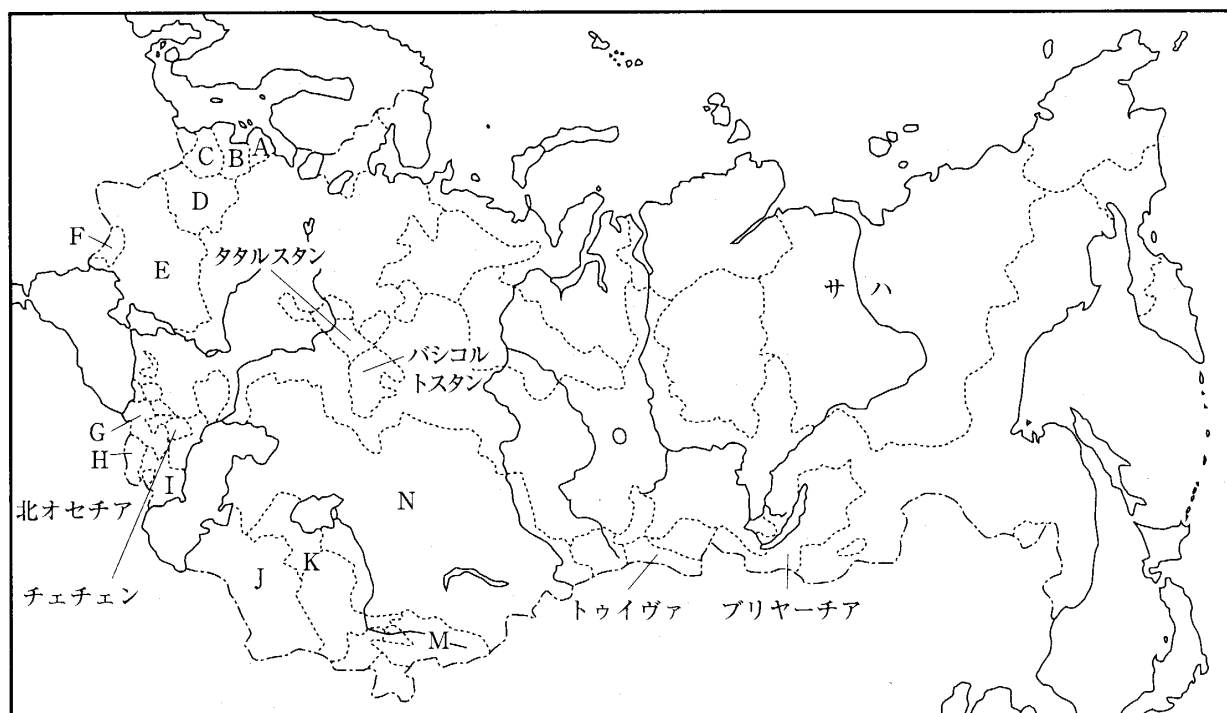
表2によって、ソ連のロシア人についての全体的状況を見よう。

1989年のソ連で、ロシア共和国以外の14共和国に住むロシア人は、2530万人であったが、ロシア人がもっとも多いのは、ウクライナ、ついでカザフスタンで、第1欄に示したように、絶対数から言えば、この3国が他を引き離している。第2欄で比率で見ると、ロシア、カザフスタン、ラトヴィア、エストニア、ウクライナ、キルギジアの順で、中央アジアのカザフスタン、キルギジア、バルトのラトヴィア、エストニアが目立っている。その国の非名称民族中のロシア人の比率がもっとも高いのはウクライナで、ここでは主な構成民族はウクライナ人とロシア人である。同じスラヴ民族のベロルシアも同様である。バルト3国では、地理的にロシアに近いほど比率が高い。中央アジアではカザフスタンに6割強が集まる。

中央アジアの5共和国には1452万人が居住し、ウズベク人に次ぐ第2の民族であった。このロシア人は大部分ソヴェト期の移住によるものである。ロシア革命当時は、まだ多くはなかったが、

表2 ソ連のロシア人 (1989年人口調査による)

	ロシア人 (千人)	在住共和国人口中 の比率 (%)	非名称民族中比率 (%)	都市人口の比率 (%)	名称民族言語 修得比率 (%)
ロシア	119866	81.5	—	77	100.0
エストニア	475	30.3	78.8	92	14.9
ラトヴィア	906	34.0	70.7	85	22.0
リトアニア	344	9.4	45.8	90	37.5
ベロルシア	1342	13.2	59.5	87	27.3
モルダヴィア	562	13.0	36.4	86	11.7
ウクライナ	11356	22.1	80.8	88	34.0
グルジア	341	6.3	21.1	86	23.0
アルメニア	52	1.6	23.0	85	33.0
アゼルバイジャン	392	5.6	32.2	95	14.5
トルクメニア	334	9.5	33.7	97	2.3
タジキスタン	388	7.6	20.2	94	3.3
ウズベキスタン	1653	8.3	29.1	95	4.6
キルギジア	917	21.5	45.1	70	1.2
カザフスタン	6228	37.8	62.6	77	0.8



- | | | |
|---------|------------|-----------|
| A エストニア | F モルダヴィア | K ウズベキスタン |
| B ラトヴィア | G グルジア | L タジキスタン |
| C リトアニア | H アルメニア | M キルギス |
| D ベラルーン | I アゼルバイジャン | N カザフスタン |
| E ウクライナ | J トルクメニア | O ロシア |

鉄道労働者として1万8000人近くを占め、駐留ロシア人兵士とともに、タシケントのソヴェト政権をになった。ソヴェト期初期、この地方の共産党員はほとんどロシア人であり、たとえば1924年のカザフスタンでは、ロシア人54.3%、カザフ人11.6%であった。その後カザフ人党員が増え、この比率は次第に人口比に近づいていく。また工業化、都市化とともに、ロシア人が急激に増加し、タシケントではロシア人が、1959年43.9%を占めた。この後名称諸民族人口が増加したが、都市では依然としてロシア人の比重が高い。

その他の共和国では、沿バルトのラトヴィア34.0%、エストニア30.0%と大きな比率を占め、ウクライナ1136万22.1%、カザフスタン623万37.8%と絶対数、比率とも高かった。

これらのロシア人は、政府、党、工場、教育、研究の各方面で指導的地位を占め、ソ連全体を動かし、ソヴェト化を通じてロシア化を進めた。

次の欄を見ると、どの国でも都市人口の比率が高いことが目立っている。中央アジアのウズベキスタンのように農村人口の多い国でも、ロシア人は95%が都市に住んでおり、農業にはほとんど従事していないことを示している。ソ連解体後の工業の停滞とロシア人のウズベキスタンからの移住が照応している。キルギジアでは、ロシア革命前からロシア農民が移住しており、カザフスタンでは、1950年代の処女地開拓期、北部のステップにソフホーズが建設され、ロシア人青年が多数移住した結果である。カザフstanはソ連ではロシアに次ぐ面積をもち、北部、東北部ではロシア人が多数を占めるなど地域によって民族構成が異なるため、分裂の危険を孕んでいる。したがって独立後ナザルバエフ大統領は、統一的な国民経済の形成を目指すともに、ロシアを含めた広い領域のなかでの分業体制の維持・構築をも視野に入れ、CISの強化を唱えてきた。国内においても、首都を南東端のアルマトゥから北部のアスタナに移した。公用語もカザフ語の他にロシア語も第2語として認めるなどの政策をとっているが、他方では原住民族の権利は人権より上位にあるという原則を固持し、93年の憲法でカザフ民族の国家としてのカザフスタンについてのテーゼを前文で法的に確認した。

いずれにせよ、カザフスタンのロシア人の8-9割はロシアへの移住を望み、ここに留まってその権利を主張するために政治団体を結成するようなことはほとんどしていない。カザフスタンのロシア人を対象としたある調査では、「将来移住する」21%、「カザフ語を修得して留まる」7%、「ロシア語、ロシア文化を維持して生活する」36%、「カザフスタンがユーラシア連邦に入る」16%となっている（木村1999-167参照）。

しかし、2000年までに実際に移住できたのは18.6%、116万人である。また、工業就業人口は、1991年の156万人から95年109万人へと約50万人急減しており、工業部門の縮小とロシア人の移住が見合っている。

名称民族言語修得率は、バルト諸国、とくにリトアニアで高い。同じスラヴ系言語で修得が容易なウクライナ、ベロルシアで高いことは理解できる。ザカフカジエのアルメニア、グルジアなどで高いのは、これらの民族の文化の高さの反映であろう。反対に中央アジアで極端に低いのは、ロシア人と名称民族が別々に働き、住んでいることを示している。

表3は、それぞれの共和国の産業部門別に、ロシア人の比率を示している。

工業、運輸については、バルトのエストニア、ラトヴィアが高い。これらの国では工業化にしたがってロシア人労働者が増加し、全体の人口の中のロシア人の比率が急速に高まって、名称民族に危機感を与え、独立の一つの要因となった。中央アジアではいずれの国でもロシア人比率が高いが、ウズベキスタンなどでは2割程度で、ウズベク人の労働者も増加していたことを示して

いる。

農業は、ラトヴィア、ウクライナ、カザフスタンが、他に比べて高い。

通信、建設、商業、サービス、保健、教育は、全体の人口比率に近く、科学・芸術、管理、計算については、工業に近い傾向である。

1980年代末から90年代はじめにかけての民族的国家的組織32グループと、それに隣接する27の単一民族集落の職業の分析によれば、全体として農村のロシア人は、工業や技術の技能を持つ非農業・農業労働者が相対的に高い割合を占める。非ロシア人民族グループは、比較的、農業大学や専門学校の教育をうけた私的農業経営者か、技能を持たない農業の働き手の割合が高い。ロシア人は一般に社会的・文化的近代化のレベルが高い。それは、工業中心地への移住と、多民族農村地帯での人口比率の低下を引き起こしている。ソヴェト期、国家融資の非農業農村企業は社会的進歩の印であったが、現在は経済危機を通じて経済的立場が悪くなり、農業の存在にますます依存しつつある（Я м с к о в 参照）。

表3 ソ連各共和国国民経済部門別ロシア人比率（1989年）

	ロシア人 比率	工業	農業	運輸	通信	建設	商業	サービス	保健	教育	科学 芸術	管理	計算
ロシア	81.5	84.4	69.8	83.0	83.8	79.1	81.3	82.0	81.6	80.2	86.1	82.2	86.1
ウクライナ	22.1	26.7	9.4	25.4	23.0	24.4	22.9	26.5	25.2	24.1	30.8	31.4	29.3
ベロルシア	13.2	15.3	5.1	14.9	15.1	14.5	12.9	15.1	16.2	17.4	23.9	25.2	20.8
リトヴァニア	9.4	12.4	2.8	16.7	12.0	9.7	8.8	8.2	7.5	8.6	10.8	22.8	13.9
ラトヴィア	34.0	41.5	15.3	43.5	32.7	34.9	36.1	34.6	30.4	31.9	30.7	45.7	39.9
エストニア	30.3	43.5	7.8	40.0	29.2	28.8	27.9	30.2	29.6	25.9	20.8	43.5	36.0
モルダヴィア	13.0	21.5	3.1	19.2	17.7	15.5	13.2	18.6	13.0	13.4	23.7	23.3	26.9
グルジア	6.3	8.0	1.4	9.5	14.3	8.4	5.8	7.3	8.4	5.0	9.3	5.9	8.6
アルメニア	1.6	1.8	0.5	1.6	2.7	1.5	1.1	1.4	1.9	1.7	2.6	3.5	1.7
アゼルバイジャン	5.6	11.8	0.8	10.4	11.2	7.8	5.5	7.3	8.1	5.3	12.3	15.5	13.6
カザフスタン	37.8	52.6	19.0	46.3	48.0	48.8	40.9	47.6	40.1	36.4	48.0	46.4	52.6
キルギジア	21.5	41.4	6.8	34.1	42.4	38.6	23.9	35.3	26.8	24.0	38.5	38.4	47.0
ウズベキスタン	8.4	20.4	0.8	17.0	22.8	18.3	9.2	15.5	11.4	9.7	29.6	23.6	28.5
タジキスタン	7.6	21.1	0.9	15.6	27.1	21.6	9.2	15.0	17.3	12.1	29.1	24.1	27.3
トルクメニア	9.5	21.2	0.8	21.9	31.8	19.4	12.5	24.2	15.6	12.5	25.7	29.4	36.1

А р у т ю н я н - 100 - 101

第3章 ロシア人民族意識の高まり

ソ連解体前、ロシア共和国（正式名称はロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国）は、主としてロシア人の住む都市、州、地方（クライ、辺区）の他に、ロシア以外の民族の名称を冠した16の自治共和国、5の自治州、10の自治管区をもっていた。現在のロシア（またはロシア連邦）では、都市、州、地方の数は変わらないが、自治共和国、自治州から昇格した21の共和国、1自治州、10自治管区という編成となった。

こうしてロシアにおいても、900万人のロシア人が、他民族の名称をもち、大部分でロシア人

の比率が高い共和国等の民族的国家的組織のなかで生活しているが、これらのロシア人は、一見これまでと同じように過ごしているように見える。しかしソ連時代のイデオロギー的、社会的優越を失ったロシア人は、新たな主権国家となったロシアでいま、自らの主権と国家性のために闘うようになり、以前の社会的価値体系を、ロシア人エリートの民族的・国家的イデオロギーの支持する新しいものに取り替え、新しい諸条件に適合させつつあるのである。

エリツィンは、ソ連解体前の1990年6月12日に布告したロシア共和国主権宣言で、ロシア共和国が自らの意思でソ連に譲り渡した管轄を除くすべての問題を処理すること、ロシア共和国の憲法や法律がソ連の憲法や法律に優先すること、ロシア共和国は、自国内の天然資源の所有、利用、処分について独占権を持つことを布告し、90年12月に改正した憲法にこの内容を盛り込み、91年6月12日に選挙を行って大統領となった。この日はロシアの独立記念日とされている。ソ連の領域は旧ロシア帝国とほぼ一致しており、ソ連全体をロシアとも考えていたことからすると、ロシアがその一部で独立するというのは不思議に思われるが、このような思想は、ソルジェニーツィンの発言にも早くから表明されていた。

彼は、1973年に執筆した「クレムリンへの手紙」で、国家的配慮の中心、国民的事業の中心を、遠隔の諸大陸から引き離してシベリアに移しかえるよう提案し、「むろん、このような移しかえは、遅かれ早かれ、われわれが東ヨーロッパに対する保護者的役割を放棄する結果をもたらさずにはおかないだろう。同様に、辺境地方のいずれかの民族を強制的にわが国の領域内に引きとめておくことも、問題とはなりえない。」（ソルジェニーツィン-40-41）と主張した。のち彼は、ソ連を解体し、ロシアの領域をスラヴ3国とカザフスタン北部に縮小することが、ロシア文化を守ることにもなると主張した。90年9月には、このような思想を述べたパンフレット『ロシアの再建』が2100万部も発行され、大きな影響を与えた。ロシアについても次のように書いた。共産主義政権が崩壊すると、人工の境界で囲まれた少数民族が、ロシア人より少ないのに主権を主張し始めた。ヤクート人はサハの3分の1しか占めないのに、連邦から離れて地下資源のダイアの売りさばきに熱中している。バシキールでもカレリアでも同じで、ソ連邦はエセ連邦となっている。チェチェン、ダゲスタン、トゥヴァは各民族が3分の2以上を占めているので、離脱する資格がある。しかも国境にあるので、「去りたいならどうぞ」というわけである（川崎-316）。

これは当時のロシア人の気持ちを表現していた。

ダンロップの紹介するところによれば、1990年5月、1517人に対するアンケートの結果、ロシアはソ連に対して政治的経済的独立を得るべきであるという答えが43%、ロシアの権限の拡大を求める答えが35%であり、これまで通りは18%に過ぎない。ロシア内についてのロシア人のアンケートでは、ロシア政府が決定権をもつべきだという意見が77%に対し、民族的国家的組織の独立を求める意見は20%である（Dunlop-43）。

これはたしかに、たとえばウズベキスタンなどの独立意識と共通であるが、ロシアについてはこの点の考察が欠けていた。

1994年以降、チェチェンでの武力行使が始まると、このようなロシア民族主義の傾向はいっそう強まり、ジリノフスキーのような政治家が支持を集めることになった。

価値観や社会意識を急速に、強制されて変えることは非常に難しい。それはしばしば大衆的な民族的緊張と、さらに、紛争を引き起こす。全体の立場から、客観的にこれらの問題を解明しようとする試みは、中央の介入を望まない共和国の抗議を引き起こす（Малькова参照）。

中村 裕は、ロシア人は、帝国シンドロームの束縛から脱却しなくてはならないが、西欧の論

理もロシア独自の民族的利益の実現を保障するものではない、とし、「今日ロシア人は改めて、自らを他民族とは明確に区別し得る、独自の民族（ナーツィヤ）として確立し、なおかつ他民族をも含み込んだロシア連邦という国家を編成していく論拠を打ち立てることを迫られている」（中村-86）と書いている。

第4章 ロシアへのロシア人大移住

ロシア人にとっても、いまの居住地はふるさとであり、生活の場所であり、よほどのきっかけがなければ、移住の決断にまでいたるとは考えられない。表4のアンケートで見ると、調査した3地域のうち、バルトのラトヴィアのロシア人についてはロシアへの移住をずっと以前から考えてきたが16.5%であるが、ウクライナではペレストロイカが、カザフスタンではソ連解体、社会・経済状況の悪化が契機となって移住の意思が強まっている。

表4 それぞれ200人に、1999年末から2000年初めにかけてのインタビュー
ロシアへの移住を考えたのはいつですか（%）

	ラトヴィアから	ウクライナから	カザフスタンから
ずっと考えてきた	16.1	0.5	7.3
ペレストロイカから	9.8	19.5	4.6
民族間関係の悪化から	21.0	1.1	4.6
ソ連解体から	13.7	0.5	47.9
社会・経済状況の悪化から	24.9	6.3	23.3
その他	5.4	41.1	1.4
答えるのがむずかしい	2.4	1.1	6.4

表5 生活のどの分野で民族的差別を感じましたか（%）

	ラトヴィア	ウクライナ	カザフスタン
職業で	86.3	28.3	70.7
教育で	36.3	28.3	37.8
子供の養育と教育で	30.0	39.1	11.0
村、通り、施設の改称で	29.5	19.6	37.8
テレビ・ラジオのロシア語放送の減少で	61.6	34.8	32.9
ロシア語新聞・雑誌の減少で	10.0	19.6	9.8
生活水準で	17.4	10.9	19.5
その他	1.6	2.2	1.2

Молодиков - 141, 145

移住の契機のひとつである民族的差別についての表5は、職業でが大きいことを示している。ウクライナで1位になっている子供の養育と教育では、大なり小なり他の国でも同じであろう。職業の点では、差別もあるが、これらの国での工業の崩壊によって、仕事そのものがなくなったという要因も大きい。自分の代はともかく、子供の時代にどのようなか展望が持てないから、という意見は理解できる。テレビなどメディアでのロシア語放送や出版物の減少は、実際の生活に困る切実な問題である。村、通り、施設の改称は、直接困ることではないが、民族的環境の変化を象徴する、ショッキングな出来事であろう。

表6によると、ロシアへの移住の比率がもっとも高いのは、アルメニアで、ここから脱出したのは在住ロシア人の6割に達する。アゼルバイジャンも高く、ナゴルノカラバフ紛争からの避難が大きな理由であろうことは、たやすく推測できる。グルジアやタジキスタンも紛争からの避難が原因であろう。絶対数がもっとも多いのはカザフスタンで、116万人と3分の1以上を占める。ウズベキスタンを含め、文化的環境が違い、将来の見通しがつきにくい、あるいは住み難いといったアンケートに表明されたような理由が大きいであろう。バルト3国からの移住が比較的少ないのは注目される。

表6 旧ソ連構成共和国ロシア人のロシアへの移住

	1989年のロシア人 (万人)	ロシアへの純移住 1990-2000	
		万 人	対1989年 (%)
ベロルシア	134.2	1.8	1.3
モルドヴィア	56.2	5.9	10.5
ウクライナ	1135.6	34.1	3.0
ザカフカジエ			
アルメニア	5.1	3.1	60.8
アゼルバイジャン	39.2	18.2	46.4
グルジア	34.1	15.4	45.2
中央アジア			
カザフスタン	622.8	116.1	18.6
キルギジア	91.7	22.5	24.5
タジキスタン	38.8	22.2	57.2
トルクメニア	33.4	9.1	27.2
ウズベキスタン	165.3	45.4	27.5
沿バルト			
ラトヴィア	90.6	9.2	10.2
リトアニア	34.4	4.4	12.8
エストニア	47.5	5.8	12.2
総 計	2528.9	313.2	12.4

Н о в а я - 179

こうして、1990-2000年の間に313万人がロシアに純移住（移住者マイナス帰還者）している。

ロシアの人口は、1989年に1億4740万人から2000年1億4593万人と147万人の減少であるが、この期間の旧ソ連構成共和国からの移住を考慮すれば、自然増加率の低下の大きさが想像される。

実際50歳までの女性の出生数は、1986-90年には2.08、91-95年1.48、96-2000年1.23と減り、平均寿命は、89年男性64.2歳、女性74.5歳から99年にはそれぞれ59.9歳、72.4歳と短くなった。

さらに、ロシアから外国への移住もかなりの数に上る。ロシアから外国への移住先は、ドイツがもっとも多く、ついでイスラエル、アメリカの順である。ドイツ人、ユダヤ人も大きいが、ロシア人もかなりの規模である。ドイツ移住は、1995年には7.96万人で、続く3年は年5万人前後である。イスラエルへは年2.2-1.43万人、アメリカへは1-1.5万人である。93-95年には移住の半分はドイツ人で、13-15%がユダヤ人であった。2000年までにドイツ人、ユダヤ人あわせて半分以下となり、代わってロシア人が増加し、2000年には41%を占めた。この年、ロシア人の移住先

の半分以上はドイツ、4分の1以上がイスラエル、12%がアメリカ、2.6%がカナダ、2.1%がフランスである。イスラエルに入国するロシア人はユダヤ人の2.3倍、アメリカについては4倍である。イスラエル移住者の30%、アメリカ移住者の40%以上が大学卒で、プログラム作成など技術や知識の必要な専門職に、アメリカでは13万人、イスラエルでは5万人が就いている（Н о в а я - 179-180）。このようなロシアからの多数の移住は、とくにイスラエル社会に大きな変化をもたらしている（Н и ж н и к, Р у б и н ч и к 参照）。

第5章 ロシア連邦のロシア人・共和国名称民族の意識

はじめに、ソ連の国民の間では、それぞれの共和国の国民であるという意識と同時に、ソヴェト人という意識も生まれてきており、遠い将来には、単一のソヴェト民族に融合するであろうと考えられてきた、と述べた。

このことを、現在のロシア連邦の国民について考察して見よう。表7のロシアの4共和国についてのアンケート調査、表8、表9の数字を紹介しつつ考えてみたい。

表7 ロシア連邦4共和国住民の民族構成

	住民総数	名称民族 (%)	ロシア人 (%)	その他 (%)
タタルスタン	3,641,742	48.48	43.26	8.27
トゥヴァ	308,557	64.32	32.03	3.66
サハ	1,094,065	33.38	50.30	16.32
北オセチア	632,428	52.95	29.91	17.14

М а л ь к о в а - 8

表8 ロシア人の援助の評価

	賛成、同意する		反対、同意しない	
	ロシア人	名称民族	ロシア人	名称民族
タタルスタン	59.8	23.1	4.7	23.6
トゥヴァ	69.2	50.9	1.4	11.5
サハ	78.9	22.3	1.4	16.9
北オセチア	83.8	64.2	0.5	5.4

М а л ь к о в а - 18

表9 ロシアと共和国—ロシアの諸共和国の住民の評価

		自身をより大きく市民と思う		
		共和国の	ロシア連邦の	共和国とロシア連邦の
タタルスタン	タタール人	59.0	2.7	31.9
	ロシア人	19.0	36.1	35.3
サハ	ヤクート人	71.9	1.2	24.3
	ロシア人	34.2	23.4	36.0
トゥヴァ	トゥヴァ人	66.4	1.4	30.6
	ロシア人	13.3	31.4	50.0
北オセチア	オセット人	42.6	2.2	54.2
	ロシア人	12.6	17.0	68.6

М а л ь к о в а - 19

タタルスタン（68万km²、2002年377.98万人）は、ウラル地方ヴォルガ流域にあり、ソヴェト期、自治共和国であった。名称民族タタール人は、1989年ソ連で7番目の人口をもつ民族であったが、周囲をロシアの領土に囲まれ、分離権を行使できないという理由で、構成共和国の地位を与えられず、自治共和国に留まっていた。90年8月30日、主権宣言をおこなって共和国と称したが、これは自治共和国として最初のものである。91年6月、エリツィンがロシア大統領に選出された選挙のとき、共和国大統領にシャイミエフを選んだ。ソ連解体後の92年3月31日ロシア連邦条約が結ばれたとき、タタルstanはチェチェン・イングーシとともに調印を拒み、94年2月に権限区分条約を締結した。

1552年カザン・ハン国がイヴァン4世（雷帝）に征服されて以来、ロシアに支配され、ロシア人が移住した。タタール人が半分弱、ロシア人が4割強を占め、宗教もイスラムとロシア正教が拮抗し共存する国である。

タタール人は、1989年ソ連全体で664.9万人であったが、この共和国に住むのは176.5万人であって、ロシア内では隣のバシコルトスタンに112万人、中央アジアのウズベキスタンに48万人、カザフスタンに32.8万人など自身がディアスポラである。

この国の住民のうち、ロシア人は6割がロシア人の援助を評価しているが、タタール人は評価23%、評価しないが24%である。タタール人は6割が、タタルスタン共和国国民の意識であり、ロシア連邦にアイデンティティをもつのは2.7%に過ぎない。共和国、連邦両方にアイデンティティをもつのは3割である。これに対しロシア人は共和国に19%、連邦に36%となっている。

サハ共和国（310.32万km²、2002年294.81万人）は、極東地方にあり、面積はロシアの18%を占め最大であるが、人口は100万に満たない。民族構成は、ロシア人50.3%、名称民族ヤクート人33.4%などである。

ヤクート人は、ロシアのアジア地域では、ブリヤート人41.3万人に次ぐ38万人で2番目の民族である。ここには少数民族として、エヴェンキ、エヴェンなどが、ヤクート語で生活している。このような条件によって、ヤクート人の民族的自尊心は高く、それが自立の動きの背景をなしている。

ダイヤモンド、金その他、石炭、天然ガス、鉄鉱石、錫など天然資源が豊かであるが、ロシア人もヤクート人もロシア人の援助をタタルスタンにくらべ高く評価していることは興味深い。ロシアがこれらの地下資源を開発したからであろう。アイデンティティについては、ヤクート人の7割以上、ロシア人の3の1が共和国を上げているのは、モスクワから遠い極東にあるからであろうか。連邦に対してはロシア人でさえ23.4%と低い。

トゥヴァ共和国（17.05万km²、2002年30.55万人）は、1989年人口30.92万人、トゥヴァ人64.31%、ロシア人32.03%、カザフスタン国境とバイカル湖の中間にある。1914年ロシア帝国保護領となり、ロシア革命後21年8月にタンヌ・トゥヴァ人民共和国として独立し、26年モンゴル人民共和国と友好条約を結び、31年牧民の集団化に着手した。18世紀にモンゴルから伝わったラマ教から脱する政策がとられ、30年モンゴル文字はラテン文字に代えられ、41年にはさらにロシア文字とされた。44年10月11日ソ連に併合されて自治州となり、61年10月自治共和国に昇格する。90年7-8月民族意識の高まりのなかで、数百人が死傷するデモがおこなわれ、ロシア人など3000人が脱出した。91年に主権宣言をおこなってトゥヴァ人民共和国となったが、ソ連解体後はトゥヴァ共和国となり、92年3月に大統領選挙をおこなってロシア連邦に加わった。その後トゥイヴァ共和国と改称し、モンゴル国との連携を強めようとしている。

モンゴル国に北接してはいるが、名称民族トゥヴァ人は、チュルク系民族で、ウリヤンハイと、19世紀のヨーロッパではソヨートと称されていた。トゥヴァ人はトゥイヴァに19.8万人、その他モンゴル国に2.5万人居住している。

トゥヴァ人のロシア人の援助の評価は低く、アイデンティティは、共和国に66.4%に対し、連邦には1.4%に過ぎない。

北オセチア共和国（アラニア）（8000km²、2002年70.99万人）は、北カフカス中部にあり、人口63.2万人、オセット人52.95%、ロシア人29.91%である。12世紀にグルジアの影響で東方正教を受け入れ、10-13世紀に建国したが、モンゴルに攻撃され、キプチャク・ハン国に支配され、草原から山地に移動した。オスマン帝国領となっていたが1774年ロシアに併合された。1921年1月山岳自治共和国内にウラジカフカス（オセチア）管区、24年7月北オセチア自治州が形成され、36年12月北オセチア自治共和国となった。90年12月主権宣言、93年11月北オセチア共和国となる。穀物やブドウが栽培され、食品工業も盛んである。

オセット人は、ロシア連邦に40.2万人、うち33.5万人が北オセチアに住むが、その他グルジアに16.4万人、うち6.5万人が南オセチアに住む。北カフカス唯一のイラン系民族で、ロシア文字を使用している。東方正教徒であるが一部はイスラムである。

なお1922年4月に形成された南オセチア自治州のオセット人は88年に北オセチアとの統合を要求したが、弾圧され数千人が北に逃れた。グルジア政府は、90年12月に南オセチアの自治を廃してシダ・ハルトリ地方と改称した。オセット人はただちに南オセチア民主共和国を宣言してこれに応えた。

また北オセチア東隣のイングーシ人は、ドイツ軍に協力したとして1944年に自治共和国を解体され、強制移住されたとき、その不在の時期に領土の一部が北オセチアに編入された。イングーシ人は92年5月にその返還を要求したが、オセット人は10月に係争地の村を襲い、5万人以上のイングーシ人がイングーシェチアに逃れた。

このようなグルジアやイングーシェチアへの対抗という事情を反映して、オセット人のロシア人の援助の評価はもっとも高く、否定するものは少ない。また、共和国・ロシア連邦への帰属意識がもっとも高い。

結び アイデンティティの広域化へ

アンケートで紹介したように、大部分のロシア人は、ロシア以外の旧ソ連構成国にアイデンティティをもたず、ソ連にそれを求めている。ロシア人がそれぞれ現在住む地域へ定着するためには、CISの強化が唯一の道のように思われる。ウクライナ人、アルメニア人、タタール人など、ロシア人と同じく共和国をもちしかもディアスポラとして広く分散居住する民族の場合にも、事情は同じである。少数民族で、民族的国家的組織をもたない民族の場合には、さらに深刻である。ロシアではロシア連邦に対する帰属意識が強い。実際、ソ連解体以後、ロシア人などには再び結合を求める意識が強まっている。それはいくつかのアンケート調査に表れているが、ここではその状況をイヴァノフの調査で見よう（Иванов, С.О. - 107-109）。

まず各民族が独立国家をもつことの必要性について、いくつかの都市での調査の結果は、否定の答えが多くなっている。アンケートは、モスクワで837人、カフカスのスタヴロポリ908人、バシコルトスタンのウファ593人、サマラ800人、オレンブルク320人などについてのものである。

モスクワ（1994）では、必要25、否51、わからない22、スタヴロポリ（1994）、必要15、否65、わからない19、オレンブルク（1997）、14、59、26、ヤクーツク（1994）、31、45、21となっており、しかも後になるほど否定が増加している。たとえばウファでは、1993、95、97の各年、必要は、24、23、18と減り、否は48、52、60となっている。ロシア人についてでは、この傾向はもっとはっきりとしていて、必要は、19、18、6、否53、59、80である。ロシア連邦からの脱退の権利については、同じくウファについて、是44、38、40、否33、33、40、ロシア人だけについては、是34、34、27、否41、38、55である。ソ連復活について、ウファ（1997）、是36、否40、わからない23である。その形態については、単一の多民族国家14、単一の経済地域16、連合的（コンフェデラーツィア）結合13、モスクワ（1994）では、それぞれ16、21、10となっている。最後の質問について、別の文献の資料では、30、26、12である（Иванов, Россия-127）。この文献には、旧ソ連共和国との結合強化について、是62、否18、解答困難15、ソ連復活について肯定的39、無関心15、否定的22、回答困難19という答えがある。結合強化についてはベロルシアでは46%、ウクライナ42%、カザフスタン16% などとなっている。

分散少数民族の例として、朝鮮人（高麗人）の場合を考えてみよう。朝鮮人は韓国、北朝鮮という国をもっているが、ソ連のなかには国家的組織をもたず、約44万人とソ連で人口19番目の比較的大きな民族で、半数は中央アジア諸国に、その他極東地方などに分散していた。もともと農村で綿作に従事し、根を下ろしていたが、カザフスタンなどが独立すると、土地利用権などの関係で都市に移住せざるをえなくなった。朝鮮人を排除し、名称民族がコルホーズなどの主導権を握ろうとしてしているためである（和光大学-131-132）。1万8000部発行され、ソ連全土で読まれていた朝鮮語の新聞『レーニン・キチ』（『レーニンの旗』）は、96年に、アルマトゥでヤン編集長に直接聞いたところでは、すでに3000部に減っており、政府の援助もその年限りということであった。朝鮮語を母語とする朝鮮人は、79年62.1%、89年49.4%と急減し、50歳以下で話せる者はほとんどいなくなり、ロシア語を母語とするようになった。しかし、諸ソ連構成共和国が独立し、名称民族語が公用語となったことによって、危機に直面している。

ロシア連邦の中の共和国についても、アイデンティティの状況は同じで、タタルスタン共和国のタタール人は帰属意識を共和国に対してもつ者が多いのに対し、ロシア人はロシア連邦にもっている。トゥイヴァやサハ共和国では、ロシア連邦にアイディティティをもつ名称民族はもっと少ない。これらの大部分の国では、ロシア人が多数を占めるにもかかわらず、名称民族は今のところ、独立傾向をもっているのである。

しかし、グローバリゼーション、都市化の進展とともに、国際化と民族的混住が急速に進み、民族別に独立国家を形成することは次第に非現実的になりつつあり、諸国家の統合は趨勢のように思われる。アイデンティティをより広域化することが必要になっている。その際ロシア人をはじめとするディアスポラの存在は接着剤になりうるのではなかろうか。

いまロシアにおこった「置き去りにされた」ディアスポラ・ロシア人の問題の解決は、世界的に一般的意義をもつように思われる。本稿では、このような観点から、旧ソ連のロシア人をめぐる問題状況について、最近ロシアで発表されている資料に基づいて考えてみた。

引用・参考文献

- Абдулатипов, Р. Национальный вопрос и государственное устройство России. М., 2000.
- Аверинцев, С. С. и др. ред. Государственные языки в Российской Федерации. М., 1995.
- Агеева, Р. А. Какого Мы Роду-племени. М., 2000.
- Арутюнян, Ю. В. и др. ред. Русские. Этно-социологические очерки. М., 1992.
- Евстигнеев, Ю. А. Российская Федерация Народы и их подразделения. С.-Петербург, 2003.
- Иванов, В. Н. и др. ред. Россия. Центр и регионы. Выпуск 3. М., 1999.
- Иванов, В. Н. и др. ред. Социология межнациональных отношений в цифрах. М., 1999.
- Игрицкий, Ю. И. Россия и ее соседи. М., 1996.
- Котов, В. И. Народы союзных республик СССР. М., 2001.
- Лебедева, Н. М. Новая русская диаспора. М., 1995.
- Малькова, В. К. Русское население в российских республиках. М., 1996.
- Попков, В. Феномен этнических диаспор. М., 2003.
- Сахаров, А. Н. и др. ред. Россия в XX веке. М., 1999.
- Троицкий, Е. С. Русская этнополитология. Том 1-2. М., 2001.
- Ямсков, А. Н. Русское население в полиэтничных сельских районах Закавказья, Сибири и Урала. М., 1997.

Диаспоры

- 2001-1 Колсто, П. "Укореняющиеся диаспоры, русские в бывших советских республиках."
- 2001-2-3 Пилкингтон, Х. и др. "Чужие на родине. Исследование диаспоральной идентичности русских вынужденных переселенцев."
- 2002-1 Молодиков, И. "Миграционное поведение русскоязычного населения Латвии, Украины и Казахстана конец 90-х гг."
- 2002-2 Рубинчик, В. "Русскоязычные иммигранты в Израиле 90-х гг."
- 2003-1 Нижник, М. "Особенности культурной интеграции выходцев из СССР/СНГ в Израиле"

Новая российская энциклопедия. Том 1. Россия. М., 2003.

Dunlop, J. "Russia in search of an identity?" New States, New Politics: Building the Post-Soviet Nations, ed. by Bremmer, I. and Taras, R., NY, 1997.

ソルジェニーツィン、アレクサンドル、江川 卓訳『クレムリンへの手紙』、新潮社、1974。

川崎 渉『「英雄」たちのロシア』、岩波書店、1999。

中村 裕「民族的アイデンティティの模索」『ロシア研究』第21号（1955、10）

兵頭慎治『多民族連邦国家ロシアの行方』、東洋書店、2003。

和光大学モンゴル学術調査団『変容するモンゴル世界』、新幹社、1999。

木村英亮「ロシア連邦の少数民族」『横浜国立大学教育人間科学部紀要第2類』No.1, 1998, 『ロシア現代史と中央アジア』、有信堂、1999 等の拙稿を利用した部分の出典は省いた。